IBDと就労

第19回　後ろを向くな　前を見ろ！

中山泰男
なかやまやすお●1964年生
17歳でクローン病発症。小腸機能障害1種1級。2001年熊本IBD設立。現在は養護老人ホームの施設長として勤務。趣味はツーリングと全国患者会めぐり。熊本IBD会長。九州IBDフォーラム代表。

よく耳にする言葉に「健康が一番」「健康は財産」というものがある。これは一般論としてはその通りであろう。この類いの言葉に「私たちのことを理解していない」と敏感に反応する人たちがいる。多くは難病患者さんで「治らない病気」という十字架を背負って生きてきたのだから、無理からぬこと。しかし一般論に対して、感情を直球で投げ返しても、相手との関係は最悪になるだけだ。中には「自分は正直者だから」と開き直る者までいるから始末が悪い。

ＩＢＤ患者会に参加すると、「健康第一」論に反発する会話が耳に飛び込んでくる。ある意味でエネルギッシュな人として評価したい。できればそのエネルギーを社会啓発に使ってほしいと思うのだが、息巻く人ほど愚痴で終わってしまうようだ。

Ｏ君（38歳 ＵＣ）は常に怒っている。「社会は俺たちなんか受け入れてくれないんですよ」が口癖。入院中、見舞い客の「早く良くなってね」の言葉にも「治らないからここにいるんだよ！」と興奮してみせる。就職口を頼まれたが、紹介できるわけがないだろ、バカヤロー。

Ｔさん（22歳 ＣＤ）から、就職の面接で「健康面に問題ないですね？」と聞かれ、頭が真っ白になり何も答えられなかった、と泣きながら連絡があった。彼女は病気の開示を恐れて一般面接を受けたのだ。会社にとって、応募者の健康状態は採用を決定する上で重要な情報である。採用時の参考資料として、また採用予定の部署で必要な労務が提供できるか確認するために、必要項目について診断書の提出を求めることができる。

実は、Ｏ君とＴさんは似た者同士だ。相手は当たり前のことを投げかけているのに、過剰に反応してしまっている。普段からＩＢＤ患者であることに負い目を感じ、自分の中で健康（病気）問題が必要以上に大きく膨らんでいるのだ。だから、何気ないひとことで弾けてしまう。もっと冷静な目で自分と病気をみつめる余裕を持ってほしい。

私は長いこと職場で面接官を勤めてきた。何気ない質問から不安を抱える人を嗅ぎわけることができる。多くは表情から、あるいはつじつまの合わない回答からだ。しかし、エネルギーを発する人材には、挨拶と笑顔だけでとりこになる。会社側がほしい、と思う人材であれば、目の前のリスクなど小さなものだ。

あの松※下幸之助さんは、面接で「あなたは自分に運があると思うか？」と質問し、「ある」と答えた人を迷わず採用したという。仕事は覚えれば良いが、物事を前向きに考える人こそが会社を発展させるからだそうだ。自分が病気だから一般論にも噛み付く。面接を受けられる体調なのに「問題ありますか？」と聞かれ固まってしまう。これでは一般人や面接官に不快感や不安を与えるだけだ。

私は「病気になって良かった」と語るたくさんの難病患者さんを知っている。それは、自分にとって本当に必要な人に出会えたからだという。その方々は、本当に元気なオーラがあってカッコいい。病気になったことは、運が良かったのか、悪かったのか。

話は最初に戻るが、「健康が第一」と話す人に「なぜ、そう思うのですか？」と聞いてみることがある。すると、時々「三年前にガンの手術をした」「子どもを病気で亡くした」という返事が返ってくる。病気の経験や、愛する人を失ったことで、心から「健康の大切さ」を感じる人もいる。それに対し「理解していない」と怒る人は、相手をおもんぱかる気持ちの余裕が足りないのかもしれない。「運がある」人とは、何事も前向きに考えられる人だろう。逆転の発想。気持ちの切り替えが、心に余裕を生み、本来の自分を引き出してくれる。

今年3月末にＩＢＤネットワークがＮＰＯ法人となった。前を向き、一緒に行動してくれる仲間がいることを、心から幸せだと思う。

※ パナソニック株式会社の創業者